

グッド・シェパード

2007(平成19)年8月30日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督・製作＝ロバート・デ・ニーロ／脚本＝エリック・ロス／出演＝マット・デモン／アンジェリーナ・ジョリー／ロバート・デ・ニーロ／タミー・ブランチャード／エディ・レッドメイン／リー・ベイス／ケア・デュリア／ウィリアム・ハート／ジョン・タトゥーロ／アレック・ボールドウィン／マイケル・ガンボン／ビリー・クラダップ／マルティナ・ゲデック／ジョン・セッションズ／オレグ・ステファン（東宝東和配給／2006年アメリカ映画／167分）

第4章

現実から目をそむけるな！

……名優ロバート・デ・ニーロが13年ぶりに監督として渾身の力で描いたのは、1961年4月17日のピッグス湾侵攻作戦を中心としたCIA創設の物語と、その中で波乱の人生を生きた主人公の物語。歴史上の事実を踏まえたうえで、フィクションとして構築された2時間47分の壮大な叙事詩は圧巻！ 他方、CIAの任務遂行と家族の絆の両立は難しく、そこから生まれる悲劇はくっきりと、そして主人公の悲哀もふつふつと……。アカデミー賞候補になることまちがいなしと確信できるそんな問題提起作を、是非あなたの目で……。

グッド・シェパードとは……？

「現代最高の名優」と呼ばれるロバート・デ・ニーロが13年ぶりに監督した渾身の監督第2作目のタイトルは『グッド・シェパード』だが、その意味は……？

世界最大のベストセラー本が『聖書』だが、聖書に親しみの少ない日本人には「グッド・シェパード」という言葉の意味はわかりにくいかも……？ しかし、世界標準としては、ほぼ誰でもわかるもの……？

すなわちそれは、イエス・キリストが述べた有名な「私は良き羊飼いである。良き羊飼いは羊のために命を捨てる」という言葉の中の1つの単語。聖書の登場人物であるアブラハムなどのイスラエルの民は遊牧民として羊を飼う生活をしてきたから、羊飼いを正しく導く「良き羊飼い」は待ちこがれていた存在であるところ、イエス・キリストは「私こそが本当の良き羊飼いである」と宣言したわけで、それが聖書のこの

言葉なのだ。しかして、ロバート・デ・ニーロ監督はCIAの創設という使命のために身を捧げた主人公エドワード・ウィルソン（マット・デイモン）をアメリカ合衆国のための「良き羊飼ひ」と評価し、この映画を監督したわけだ。

1945年の敗戦後、平和憲法の下でノー天気な経済至上主義に陥ってしまった日本国では、スパイや諜報活動についての評価は低く、その必要性についての認識は驚くほど低い。しかし第2次世界大戦終了後、東西冷戦からキューバ危機へと緊迫する世界情勢の下におかれたアメリカ合衆国では……？

ホントの意味での「良き羊飼ひ」か否かは別として、1961年のピッグス湾事件から46年を経た2007年の今、エドワード・ウィルソンを「良き羊飼ひ」に喩えたこの映画の問題提起が限りなく大きいことは明らかだが……。

スカル&ボーンズとは……？

モーツァルトが世界的な秘密結社フリーメイソンのメンバーだったという話がホントかウソかは知らないが、アメリカにスカル&ボーンズという秘密結社(?)があることはまちがいない事実。これはイエール大学を牛耳るエリート集団で構成されている秘密組織で、アメリカの現大統領ジョージ・W・ブッシュやその父親のジョージ・H・W・ブッシュがそのメンバーであることは有名なお話。この映画では、多くの日本人が知らない、そんなイエール大学におけるスカル&ボーンズの様子が詳しく描かれているのが興味深い。

そもそもエドワードが諜報の道に足をふみ入れたのは、イエール大学在学中にこのスカル&ボーンズに入会したことが大きな契機となったもの。知的好奇心が旺盛でアメリカ合衆国のために何をなすべきかを常に考えている優秀なイエール大学の学生にとって、スカル&ボーンズへの道はある意味理想のコース。先輩のフィリップ・アレン（ウィリアム・ハート）の紹介でビル・サリヴァン将軍（ロバート・デ・ニーロ）と対面し、第2次世界大戦における具体的な諜報活動への参加を要請されたエドワードが喜んでこれを受けたのは当然。なぜなら、少年時代のエドワードは、誰にも告白していないし、その遺書を開封さえしていないものの、海軍の高官だった父トーマス・ウィルソン（ティモシー・ハットン）がピストル自殺するのを目の前で目撃し、父親にかけられた汚名を晴らすような働きを合衆国のためにすることをひたすら目指していたのだから……。

私の目からみれば、このスカル&ボーンズへの入会の儀式やそこでの討議の様子はかなりバカげたものと見えるが、当の本人たちは決してそんなことはなさそう。そしてジョージ・W・ブッシュが父親のジョージ・H・W・ブッシュの後を継いでこのスカル&ボーンズに入会したように、父親と同じようにイエール大学に入学したトーマスの息子エドワードが同じようにこのスカル&ボーンズに入会し、諜報の道に進んだのは、因縁といえば因縁だが、実はそれが不幸の始まりだったとは……？

フィクション歴史物語とは？

この映画は「フィクション歴史物語」という範疇に属する、らしい……。 「フィクション歴史物語」とは、歴史上の事実を踏まえたフィクションとして再構築されたドラマのこと。まず、主人公のエドワードは数人の諜報員をモデルとして創造されたキャラクターだが、彼を諜報の道に導いたビル・サリヴァン将軍は実在の人物。また、第2次世界大戦中につくられたOSS（戦略事務局）や第2次世界大戦終了後のCIA創設の物語そしてピッグス湾事件におけるCIAの情報漏れなどもレッキとした歴史上の事実。

もっとも、そういう歴史上実在した人物や歴史上の事実を踏まえてはいるものの、すべてを史実にもとづいて再現したのでは面白くも何ともなくなってしまうのは当然……？ したがって、そこにフィクションを入れこむことによって、個々の人物像をより深く掘り下げ、また歴史上の事実をさらにくっきりと浮かび上がらせたのがこの映画。

すると、「ユリシーズ」のコードネームを持つKGBの大物スタス・シヤンコ（オレグ・ステファン）やアメリカに亡命した元KGB士官のヴァレンティン・ミロノフ（ジョン・セッションズ）は実在の人物……？ またFBI捜査官のサム・ミュラッハ（アレック・ポールドウィン）も実在の人物……？ さらにこの映画で紅2点として登場する、エドワードの妻クローバー（アンジェリーナ・ジョリー）やエドワードの大学時代の恋人ローラ（タミー・ブランチャード）は……？ さらに、ピッグス湾侵攻作戦における情報漏れのキーマンとなるエドワードの息子エドワード・ウィルソン・ジュニア（エディ・レッドメイン）の存在とその人物像は……？ 史実とフィクションが入り交じっているだけに、余計この映画が面白くなっていることはまちがいない！

第4章

現実から目をそむけるな！

まずは、キューバ危機とは……？

キューバでは重病説がささやかれていたフィデル・カストロがなお健在。また2006年7月31日に兄フィデルが腸の手術を受けたため数週間権限の委譲を受けた、弟のラウル・カストロも順調に自分の役割を果たしているよう。またカストロ以上に人気のある亡チェ・ゲバラは、『モーターサイクル・ダイアリーズ』（04年）で映画化されるなど、今なおキューバ国内での人気は高い。

今アメリカは、そんなキューバと野球選手の大リーグへの受け入れをはじめ、各種分野で交流を深め、「仲良く」やっているが、1962年10月の「キューバ危機」のことを考えれば、まさに今昔の感がある。米ソ冷戦、東西冷戦の緊張状態が続く中突如発生したのが、キューバで発見されたソ連の中距離弾道ミサイル基地問題。喉元につきつけられたこの基地からアメリカ国内に核ミサイルが発射されたら、アメリカは一大事。そこで展開された、ケネディ大統領とフルシチョフ大統領との駆け引きとケネディの決断、そしてこのキューバ危機の顛末は『13デイズ』（00年）に詳しいので、この『グッド・シェパード』を観る前提として、それも是非鑑賞を……。

次に、ピッグス湾侵攻作戦とは……？

そんな世界的に有名なキューバ危機の少し前、すなわち1961年4月17日に、ピッグス湾事件という大事件が発生していたことを、日本人は意外と知らないはず。これは、アメリカの支援を受けた亡命キューバ人の部隊がカストロ政権の転覆をもくろみ、ピッグス湾に上陸したもの。ところが、CIA内部の情報漏れによってこの作戦はあえなく失敗したため、CIAは窮地に追い込まれることに……。

さあ、2時間47分に及ぶ大作である、『グッド・シェパード』の物語は、そんなピッグス湾侵攻作戦の指揮をとったベテラン諜報員エドワード・ウィルソンの元に送られてきた1本のテープからスタートする。ピッグス湾上陸作戦はなぜ大失敗に終わったのか……？ また、CIAの極秘情報がなぜキューバ側に筒抜けになっていたのか……？ ノー天気な今ドキの日本人こそ、こんな映画からしっかり学ばなければならないのだが……。

熱演だが、19歳から41歳まではちょっと……？

私がマット・デイモンをはじめて観たのは、彼がアカデミー賞主演男優賞にノミネートされた『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』（97年）だったが、それから10年、彼は今やハリウッドを代表する俳優に成長した。彼の演技力は抜群だが、弱点は意外に小柄なこと……？ 『ボーン・アイデンティティー』（02年）以降、ジェイソン・ボーンがシリーズ化され、アクション俳優としての地位も固まったが、私としてはその点が少し気がかり……？

またハンサムであることは、一般的には有利な条件だが、この映画のエドワードのように、家庭において仕事のことは絶対秘密という生活を何十年も続けているという役を演じるには、ハンサムさは何の役にも立たず、いわゆる「性格俳優」としての能力が問われることになる。

また一般的にハンサムな男性は年齢も若く見えるから有利だが、この映画のエドワードのように19歳から41歳までを演じ分けるとなると、ハンサムさが逆に邪魔になる可能性も……。

この映画は1961年4月17日のビッグス湾侵攻作戦の事件が第1のポイントだが、第2のポイントは、エドワードのイェール大学在学中における恋模様を展開と、ビル・サリヴァン将軍に勧められてOSSに参加する中で、諜報員活動の意義とその面白さに目覚めていくところ。

1961年当時エドワードが41歳であれば、第2次世界大戦の前夜である1939年当時は19歳。つまり、マット・デイモンは19歳から41歳までのエドワードを演じ分けなければならないわけだ。しかしこれは、いくら演技派であってもかなりしんどいこと。さて、そんな演技についてのあなたの採点は……？

エドワードの誠実さと二股性をどう考える……？

アンジェリーナ・ジョリーは派手できつい目の顔立ち（？）と豊満な肉体を駆使した『トゥームレイダー』（01年）のイメージが強いが、『すべては愛のために』（03年）や『テイキング・ライブス』（04年）など社会性に富んだ役柄も多い。また私生活の面でも、2001年に任命された国連難民高等弁務官事務所の親善大使の仕事に熱心に取り組むなど、決して肉体派だけの女優でないことは明らか。

そんなアンジェリーナ・ジョリーが演じているのは、上院議員ラッセル（ケア・デューリア）の娘クローバー。わがまま放題に育った彼女がイエール大学に通っていたのは、ある意味理想の結婚相手を探すため……？ したがって「これぞ運命の男！」と見極めたエドワードと結婚するため、自ら肉体関係を迫っていくなど、クローバーの行動力は抜群だった。そして婚前交渉の結果妊娠したことが明らかになると、当然のようにエドワードとクローバーはゴールインすることになったが、結婚を迫る兄ジョンの発言を聞いていると、こりゃ半分脅迫気味……？

エドワードには以前から図書館で知り合った聾啞の恋人ローラがいたのだが、エドワードはそれを誰にも言えないまま、クローバーとゴールインしてしまった。するとそれは、クローバーの強引さとクローバーが妊娠したことの責任をとった（とらされた）ため……？ その意味ではエドワードは誠実な男だが、クローバーに対する誠実さは、明らかにローラに対しては不誠実……？

客観的に見る限り、エドワードが当初から二股をかけていたとは思えないが、どう見てもエドワードがホントに愛情をもっていたのはクローバーではなくローラだったよう。したがって、エドワードはやはり一時的にクローバーに対しては不誠実な男になっても、ローラとの純愛を貫いた方が良かったのでは……？ もっとも、そうしたとしても、エドワードとローラの結婚生活がうまくいったかどうかは微妙だが……？ CIA やピッグス湾侵攻作戦にあまり興味をもてない女性の方は、こういう恋愛模様の機微に注目してみてもいいか……？

仕事と家庭の両立は……？

仕事と家庭の両立は「できる男」にとって永遠のテーマ（？）だが、それには仕事に対する妻の理解・協力と、家庭に対する夫の理解・協力が不可欠。ところがエドワードの仕事はCIAの諜報員だから、①いつ、どこで、何をしているのか、②今何を考え、何を悩んでいるのか、③1年後、3年後、10年後の仕事はどうなっているのか、等々が妻には全くわからないから妻はちょっとしんどい……？

たしかに、エドワードに対して結婚を迫ったクローバーの見立てどおり、エドワードは大学を卒業した後、仕事の上ではメキメキと頭角をあらわしたが、それは遠いロンドンにおけるOSSでの仕事。したがって、第2次世界大戦中は1度も夫と顔を合わせることもなく、クローバーは1人長男を育てていく生活を余儀なくされることに。

そして、やっと戦争が終わり、夫がアメリカに帰ってきた後、今度は CIA 創設のためにフル稼働。これでは家庭のことを考える時間など全くないうえ、その仕事内容は完全に秘密で、仕事に関する会話は一切シャットアウト。これでは妻はやってられないのは当然……。

しかして、エドワードの CIA での役割が大きくなり、仕事の質と量が高度化すればするほど、仕事と家庭の両立は難しいことに。すると、その結果は必然的に……？

子育ては難しい……

弁護士は事務所を構えて仕事をする職種だが、裁判官、検察官は2、3年毎の転勤が義務付けられているし、国家公務員の上級職もそれは同じ。もっとも、これはあくまで日本国内での異動の話。しかし、商社マンは海外勤務が多いから、本人はもちろん家族も大変。結婚直後は単身での赴任もあるが、子供が小学校に入る頃になるといろいろと難しい問題が発生しがち……？ それは、クローバーはもちろん、エドワードとクローバーがはじめて結ばれた日に生まれた長男エドワード・ウィルソン・ジュニアにとってはもっと深刻だった。

第2次世界大戦中、ずっとエドワードは OSS の任務でロンドンへ赴いていたため、ジュニアは6歳まで1度も父親の顔を見ることなく育つことに。そのうえ、エドワードはアメリカに戻ってからも CIA の任務に没頭していたため、多分ジュニアは父子でキャッチボールなどをして遊んだという経験は1度もないはず……？ したがって、頭の中では父親の仕事を理解し尊敬しているものの、小さい時から父と息子の関係がギクシャクすることになったのはやむをえないもの。

しかして、さまざまな苦悩の中、ジュニアはジュニアなりにそれを克服し、尊敬する父親に認めてもらいたいという一心から、父親と同じくスカル&ボーンズに入り、その後も CIA 諜報員の道を歩むことになったが……。

諜報戦は面白い その1——CIA 対 KGB

この映画では、CIA におけるエドワードの活躍と苦悩そして妻と息子との関係における苦悩を大きな2つのテーマとして、2時間47分にわたって濃厚なストーリーが展開される。したがって、それをひとつひとつ紹介していると10頁以上の大評論になってしまううえ、そんな書き方をしたのでは、逆にこの映画を観る気がなくなってしま

うかもしれない。そこで以下、この映画で展開される諜報戦については、その面白さを2点だけ指摘しておきたい。

その第1は、何とんでもなくCIA対KGBの諜報戦の面白さ。007ことジェームズ・ボンドは「殺しのライセンス」を持ったイギリスのスパイだが、ジェームズ・ボンド映画に描かれる彼の活躍はいかにも「陽」。ところが、スパイや諜報従事者は、日本では「忍者」と言われていたように、本来「陰」の仕事。したがって、学生時代のエドワードはともかく、CIAの創設メンバーとなり、1961年のピッグス湾侵攻作戦を指導したエドワードは、マット・デイモンがその役づくりに苦勞したように、陰そのものの性格であったのは当然……。

アメリカがCIAなら、東西冷戦時代のソ連の諜報機関は有名なKGB。冷戦当時は、ジェームズ・ボンド映画の最高傑作である第2作『007/ロシアより愛をこめて』（63年）のように、共産主義国家ソ連からの亡命を装ったスパイがアメリカに流れ込んでいた可能性がある。それは、北朝鮮から韓国へ流れ込んでいるスパイがたくさんいるのと同じような構造……？

この映画で大きな役割を演じるKGB士官がヴァレンティン・ミロノフだが、幾重にもわたるチェックを経て、亡命ましがいなしと判断されていたミロノフと同姓同名のKGB士官がアメリカへの亡命を求めてきたから、さあ大変。さて、どちらがホンモノ……？

他方、そんなKGBの大物諜報員がユリシーズのコードネームをもつスタス・シヤンコ。彼はOSS時代からエドワードと深い関わりをもっていたが、エドワードのピッグス湾侵攻作戦における大失敗の後処理をめぐって、何ともすごい知能戦が……。

007＝ジェームズ・ボンドのカッコ良さを楽しむのもいいが、CIA対KGBの諜報戦のホントの面白さは、「フィクション歴史物語」であるこの映画で……。

諜報戦は面白い その2——CIA対FBI

アメリカにはCIAの他FBIという組織があることは、ハリウッド映画に親しんでいる日本人はよく知っている。しかし、その役割分担や機能の違いなどはあまりよくわかっていないはず。この映画を観れば、少なくともCIAよりFBIの方が先輩だったということはすぐわかる。それは、第2次世界大戦直前の学生時代に、エドワードはFBI捜査官のサム・ミュラッハからの接触によって、親独派のフレデリックス教授

(マイケル・ガンボン)の身辺を探る任務を依頼されたことから明らかになるはず。

ビッグス湾侵攻作戦はCIAの独走によるものだったらしく、それを知ったケネディ大統領は烈火の如く怒り、以降CIAの解体に向けていろいろな手を打つたらしいが、それにもかかわらずCIAが今日まで生き残っているのは一体なぜ……？ そんなアメリカ内部における、2つの諜報組織の勢力争い(?)を横目で見ながら、諜報戦の面白さをタップリと味わいたいものだ。

この映画は、5つの見方が……？

2時間47分に及ぶこの大作は、いろいろな見方をすることができる。その第1は、CIAの前身であるOSSからCIAの創設、そしてビッグス湾侵攻作戦におけるCIAの大失態とその後処理を描く映画。第2は、エドワードの学生時代の恋人であった聾啞の恋人ローラとの恋と、その間に割って入ってきたクローバーとの二股の恋模様の苦悩を描く映画……？

第3は、優秀な学生であった19歳のエドワードが、生涯の仕事と定めたOSSとCIAの仕事に一生を捧げるサマを描いた映画……？ そして第4は、仕事に熱中するあまり大切な一人息子ジュニアとの対話に欠けることになり、その結果息子がえらいことをしでかしてしまったという、良き父親になれなかったエドワードの失敗談を描いた映画……？

こんな見方の提示は決してこの映画を茶化しているのではなく、ホントに人それぞれこんな見方ができるはずだと私が確信しているもの。そして第5にもう1つ、この映画はエドワードの元に送りつけられてきたテープと写真を解明していくサスペンスモノという見方も可能。さて、このテープの声は誰の声……？

テープの声は、誰の声……？

映画の冒頭に登場するテープの声はかなり雑音が入っているが、明らかにベッドの上で交わされている男女の会話。そして、それは同封されていた数枚の写真によっても裏づけられるもの。そこで問題は、誰が、何のために、これをエドワードの元に送ってきたのかということ。それを解明するためには、写りの悪い写真から人物や場所を特定し、またテープの音や声からその人物とその会話が交わされた場所を特定しなければならないのは当然。

2時間47分に及ぶこの映画の解析作業を見ていると、あなたはきっとCIAの解析能力のすばらしさにビックリするはず。すなわち、テープに録音されている雑音を含めたさまざまな音声の分析によって、その会話が交わされた場所までかなりの精度をもって特定されていく様子は、ホントに衝撃的かつスリリング……。

さまざまな物語が展開されていく中、冒頭からラストに至るまで一貫した筋として通っているのが、この音声の解析作業だ。したがって、①エドワードとローラの再会、②CIAへの就職を希望するジュニアを不採用にしてくれと頼むクローバーとエドワードとの口論、③エドワードとクローバーとの離婚、④エドワードとローラの密会がキャッチされていたことによる、エドワードとローラの離別、等さまざまな人生模様を経て、2時間を超えたあたりから(?)、エドワードはテープが録音されたと断定された場所、建物へ単身赴くことに。

さて、それは一体どこ……？ そして、そこには一体誰が住んでいるの……？ そして、その録音テープを誰が録り、何のためにエドワードの元へ送ってきたの……？ そんなこんなの実相が解き明かされていくラストに向けて、あなたの目がスクリーン上に集中させられていくことはまちがいなし……。

2007(平成19)年9月7日記